

『サ・ガウエインと緑の騎士』について

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2556538>

出版情報 : 文学研究. 34, pp.89-114, 1945-03-30. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



『サ・ガウエインと緑の騎士』について

中山竹二郎

は し が き

中世イギリス詩壇の逸品『サ・ガウエインと緑の騎士』を紹介するために、その梗概を述べようとの動機から拙稿を書き始めたのであるが、續つて考へればこの作品の背後には中世歐羅巴の物語文學といふ渺茫たる曠野が横はり、その一分野である「ブリテンもの」だけでも尅大な擴がりを有つてゐる。そこで此一篇の周邊に二三の曳光彈を投じて輪廓を一瞥してみようと思ひ、中世ロマンス文學やアサア王文學の概觀を試みに添へた次第である。その概觀も全貌をおしなべて瞥見するといふのではなく『サ・ガウエイン』の理解に役立つ部面に焦點を置いて望見したに過ぎない。とにかくわが國に餘りに知られてゐない『サ・ガウエイン』の紹介が本稿の主要な目的であり、その背景をなすロマンス文學の概説の如きは、こんな形式で扱ふには餘りに大きな題材であることを筆者は告白せねばならぬ。

一

十四世紀末葉イギリス文壇に於てはチヨウサアの放つ光芒が強く輝くため、群小作家の影は極めて薄いものとなつ

てわれわれに映するのは當然であるし、また鑑賞すべき文學作品として之に接する場合——その時代その地域の言語を記録してある文献として之を檢討する場合は別として——餘りに多くの感興をこれらの作品から受けないといふことも率直に認めてよい。「貪者の友」として近代的脚光を浴びてゐるラングランドでさへも屢々われわれにとつては頗る退屈である。愛すべき佳什「パアル」にしても中世的表象を通して良く作者の意圖した宗教的想念や輓歌的情緒に味し得る讀者は恐らく少數であらう。それは要するにこれらの作品は過去の傳統に屬する文學であるからである。殊にその手法が中世的であり、なかんづくその頭韻を用ひる古詩形が近代人の感興を殺ぐためである。假りにチヨウサアがこの古拙な詩形から超脱し得なかつたとしたら、彼は近代英詩の創始者とはなり得なかつたらう。それはど手法と題材、形式と内容が詩にあつては渾然一體をなすものである。

ここに紹介しようとする『サ・ガウエインと緑の騎士』の一篇はチヨウサアと略同じ時代の作品であり、その作家の誰なるかは之を詳にすることを得ないが、チヨウサアに次ぐ十四世紀の傑れた詩人であることは文學史家の大凡一致する見解である。取扱はれてゐる物語の素材は歐羅巴文學共通のアサア王説話から取つたもので常に新鮮たり得る題材である。しかしこの詩の形式が『ペイオウルフ』以來英詩壇の傳統となつてゐるゲルマン的頭韻法に據つてゐることは近代人から見れば一の大きい障礙である。まことに讀みづらひのである。しかしさうした障礙に拘らずこの物語詩は傑れてゐる。チヨウサアにない味を有つてゐる。

チヨウサアの愛好者はチヨウサア文學の外輪山中の一高峰としての此詩の良さを認めると同時に、外輪山より見て雲表に聳える最高峰の偉容を益々仰ぎ見るであらう。つまり作品の有つそれ自身の價值と、チヨウサアに對する引立て

役としての効果から見て『サ・ガウエインと緑の騎士』の一篇はイギリス中世文學史上相當に高く評價され得る佳作である。

終生大陸の詩人に私淑したチヨウサアは國粹的な頭韻詩形を嘗て一度も用ひたことがない。また彼はアアサア王傳統は餘り好んで題材としてゐない。(ペアスの町の女房は明にアアサア王說話を語つてゐるし、また「フランクリン物語」も略々同系統に屬してゐる。しかし作品全體の量に比し微々たるものである。)殊に冒險を主とした武勇譚に對しチヨウサアが懷疑的であつたことはかの「サ・トウパス」の諷刺によつても推知される。してみると本稿の主題である『サ・ガウエインと緑の騎士』の如き内容や形態の物語は中世文學を構成する大きな要素でありながらチヨウサアの中に見出せないものの一である。チヨウサア研究の一環としてこの作を取上げるのもこの意味からである。

アアサア王ロマンスは中世物語文學中もつとも華かで、もつと多彩な内容を有つ一の範疇である。茲にまづ中世ロマンス一般について瞥見しよう。

二

中世人は物語文學に對し健啖であつた。試みにいま早期英語文獻刊行會(F.E.F.S.)が上梓してゐる物語の數量をみても老大なものである。單にその量が多いばかりでなく、その題材も多種多様であり、中には戰爭物語もあり、聖者傳説もあり、動物寓話もあり、古典翻案の說話あり、近代の讀者にとりては何等の興趣を催さない底の材料をも縷々として語つて倦まない中世人の物語愛好については時に驚異の念をさへ感ずるのである。殊にロマンスの分野に

あつては、彼等の間に發生した作品のみならず、東洋から傳へられた物語も歐洲諸國語の中に移された。中世歐羅巴文學の坍塌と云ふべきチウサアの中にはアラビヤ夜話系統のものや印度の佛教起源の材料も鐸け込んでゐる。中世人自らその説話文學の多様性を認め、その題材により之が分類を試みた。十二世紀末のフランス人デヤン・ボデル(Jean Bodel)が當時のロマンス文學を大體に「フランスもの」「ブリテンもの」「ロオマもの」の三つに分類したのは中世文學史上有名であり、今日猶多少の修正を加へこの範疇に據つてゐる文學史家が多い。

右三つの中「フランスもの」とは『ロオランの歌』(Chanson de Roland)の如き武勳詩であり主としてシャアレマン大帝の戰爭を主題とするものであり、「ロオマもの」は古典の世界より取材したものの外、東洋ビザンチン傳來の物語など雜多のものを含んでゐる。「ブリテンもの」とはウェイルズに住むケルト民族やフランスのブリタニイに移住した同民族の間に傳承された説話を母胎として發生した物語文學であり、アアサ王傳説がその中核をなしてゐる。アアサ王傳説が發展するにつれ國王自身のロマンスの外、圓卓騎士の中の名うての勇者達の冒險譚や聖杯探求のための遊歴や、その他アアサアの宮廷との關聯が少い事件を取扱つた物語までも數多く創作された。これらの作品を題材により分類するとき、幾多の團(cycles)を構成する。トリストラムとイスウルト(Tristan and Iseult)の悲戀を主題とする一團もあれば、ランスラット(Lancelot)に關する一團もある。圓卓騎士の典型と仰がれたガウエインがその武勇を謳ふ物語詩の一團を有つたのは蓋し當然である。さて「ブリテンもの」即アアサ王ロマンスは如何なる過程によつて生成發展したのであらうか。

(註)
 アアサア王にまつはる傳説は純然たる民族神話でもなく、また詩人の單なる空想的假作でもなく、纔ながらにも歴史的事實がこれら傳説の根底に横はつてゐることが認められてゐる。その史實の細部に關して茫漠として之を確證することは困難であらうが、おぼろげな輪郭だけは書いてみる事が可能である。それはかうである——ブリタニア、即ち現在のイギリスから羅馬帝國の軍隊が西紀四〇七年頃撤退した後、その島の住民ケルト族は海を越えて侵入し來るアングロ・サクソン蠻族と多年に亘る抗戰を續なければならなかつた。兩民族の間に互に勝敗があつたが五〇〇年頃ベイドン山(Mount Badon)の戰役に於てケルト族が決定的大捷を得た。この戰勝に國民を導いたのは同じケルト族の一將軍であつた。その後彼の祖國が頽勢に赴き、アングロ・サクソン人のために壓迫され敗北の苦杯を重ねるにつれ、嘗ての戰勝將軍は民族の救主として追憶され、景仰され、理想化され、ケルト民族に君臨する偉大なる國父として崇拜され遂には固來の民族神話と彼の事蹟と相混じ彼の偶像には超自然的光背が添へられるに至つたのである。かやうに神格化された將軍はアアサアの名を以て第九世紀の史籍にその事蹟が傳へられ、更に世紀が下るにつれ、文學の領域にとり入れられ、數多きロマンスの主人公達の中樞人物として中世より現代まで物語文學の中にあでやかな存在となつたのである。つまり傳説は歴史より供給された乏しい材料を美化し擴大して之を文學に譲り渡し、文學は之を受取つて更に洗練し理念化して今日に及んだのである。そしてこの題材は歐洲文學に弘く深く浸透し、特定の國民文學の專用物でないけれど、その背後には常にケルト民族的の雰圍氣が醸し出される。妖精的な神秘的な幻夢的

なケルト人氣質の現はれである。實にこの民族は常に事實を現實的に觀ないで、之を空想化し幻夢化して考へる傾向が強い。この點に於てアングロ・サクソン民族と著しい對照をなしてゐる。

アアサア王傳説を創造したケルト民族はブリトン (Britons) 族と呼ばれ、主としてウエイルズ (イギリス西部) に住んだが、その一部はイギリス海峡を渡つてフランスの西部アモリカ (Armorica) へ移住した。そのためその地方をブリタニイ (Britanny) と呼び、その種族をブレトン (Bretons) と名づける。かやうに國王傳説の發祥地はウエイルズとブリタニイとである。否寧ろ眞の起源はウエイルズのブリトン族の間に在つたが、その一部の移住者が之をアモリカへ携へて渡つたと見るべきであらう。アアサア王傳説がフランス人イギリス人に傳はり歐羅巴諸國民に共通の文學題材となつた後もウエイルズやアモリカのケルト族の間に於てはこれら説話は口碑として傳承され、變改展開され更に新しい材料を詩人に供給した。

いまのイギリス島王國の先住民族はかのケルト族であり、これを侵攻したのがアングロ・サクソン民族である。故にイギリス人の立場から見ればアアサアは己の仇敵以外の何物でもあり得ない筈であり、之を崇拜讚美する因縁は更でない筈である。しかるに後世のアングロ・サクソン民族は彼をさながら自國の英主の如く謳歌するに至つた。^(註)十五世紀に於けるイギリスの文化指導者たりしキャクストン (Caxton) の如きは愛國的感情よりして、アアサア王禮讚の誠が自國にて未だ足らないとなし、その遺徳を顯彰する意圖を以てマラリイ (Malory) のアアサア物語を上梓したほどである。蓋しアングロ・サクソン民族はそのかみの敵對種族デナムアク人やノルマン人をいつしか自己の中に吸收消化した如くケルト族との關係に於ても嘗ての對立觀念は永く深刻には持續されなかつたであらう。殊にアアサア傳

説が醇化されて、マリアの聖像を楯に刻んで戰陣に立つ基督教徒の國王としてアアサアが謳はれるに至り、この傳説を生んだ民族への聯想は宗教情操の中に溶け去り、イギリス國民なべての國君として崇敬されるやうになつたのであらう。この點に於て「フランスもの」と「ブリテンもの」とは著しく趣を異にする。『ロオランの歌』はフランス民族の經驗した歴史に取材し、終始フランス的であつたのに反し、「ブリテンもの」は同じくこれを生んだ民族の史實に發生の契機を持つてはるが、これが異民族の間に移し運ばれ、攝取されるにつれ、それら民族みづからの歴史の中に混入され、さらに進んでは彼等自身の愛國的信仰の對象とさへなつた。原産民族のものでもあり、同時に「國際的財産」(international property)ともなつた。初期に於てはまづフランスの詩人がこの傳説を題材としてロマンス文學を創り、後イギリス人これをフランス人より學びて愛着措かず、その内容意義また時代精神とともに變化され洗練されて今日に及んでゐる。

四

史籍に現はれた最初のアアサア王事蹟は殆どそれと同時代のギルダス(Gildas)の筆により記錄されてゐる。その後二世紀半を経てネンニアスの『ブリトン史』(Nennius: *Historia Britonum*)に初めてアアサアの名が誌されてゐるが、それは國王の位に於てではなく戰勝に輝く一將軍としてであつた。更に下つて十世紀十一世紀の史書に於てアアサアは既にケルト民族の英雄、ブリトン人の國君としての姿を現はしてゐる。かやうに漸次理念化されたアアサア傳説を集大成し系統化し、アアサア王ロマンス建設の基礎を完成したのは十二世紀のデヨフリ・オブ・モンマス

(Geoffrey of Monmouth) である。彼の「ブリタニア國王の史傳」(“Historia Regum Britanniae”)は決して“historia”ではなく神話と傳説と作者自身の想像を混じた擬似歴史であり、史實の詳確を之に求むることは烏滯の沙汰であるが、やがて咲き盛るべきアアサア王ロマンスの温床となつた功績はまことに大なるものがあつた。ネンニウスから受取つた材料を換骨奪胎したデヨフリは原始的ケルト族神話の稚拙怪奇からノルマン騎士の優雅冒險を創り出した。カメロットに於けるアアサア王宮殿にはイギリスなるノルマン王宮廷の雰圍氣が流れ込み、一日中片足で立ちつくし或は下唇を腰まで下したと傳へられたアアサア王の粗蠻な臣下どもは慍懃勇壯な中世騎士と轉身した。

デヨフリの“Historia”は弘く行はれ、多くの追隨者を出した。中にもロバート・ウエイヌ(Robert Wace)がノルマン・フレンチの韻文で西紀一一五五年に書いた『イギリスのブルウト』は國王傳説のロマンス化を更に進めたものであり、當代の精神によりケルトの説話をノルマン騎士の理念に合致せしめたものである。またアアサア王傳説中有名な圓卓の話題を初めて記述した功績もウエイヌに歸すべきである。このウエイヌの書は十三世紀初葉にレイアマン(Layman)によつてイギリス語に翻案翻譯された。このイギリス版『ブルウト』はゲルマン傳統の古詩形で書かれ、その精神に於ても『ベイオウルフ』的のゲルマン傾向の強いものではあるが、アアサア王説話を市めて英語で纏めて記述した著作として英文學上重要である。以上を要約するにギルダスに始まり、ネンニウス、デヨフリ、ウエイヌを経てレイアマンに至る間、所謂「歴史」として國王説話は漸次その内容を豊富にし洗練され發展して來た。

他方に於てこれら擬似歴史より屢々主要な材料を借用して、アアサア王或は彼の周圍の騎士を主人公とするロマンス文學が發生し展開した。前者が叙事詩的の規模により民族の首長や英雄の事績を系統的年代的に謳ふ長篇であるに

對し、後者はその長篇中の一挿話を主題とし、或は一人物を中心として或事件を叙べる物語文學である。しかしこの場合エビツクが必ずしもロマンスの母胎とはならない。その理由はアアサア王説話は累代のケルト民族の中に深く根ざし、文學の記録に頼らずして、口碑として世代より世代へ傳承されてゐるので常にロマンス作品の直接の源泉となり得る可能性を持續してゐたからである。

さてアアサア王を題材とするロマンス文學の起源に關しては餘り詳かに知る由もないが、十二世紀に於けるフランスの詩人クレティアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes)・トマ (Thomas)・ベルウル (Bérul)・マリイ・ド・フランス (Marie de France) の名が初期のロマンス作家として輝いてゐる。これらの詩人は多くイギリス國と無關係ではない。トマはイギリス人であり、マリイは生涯の大部分をイギリスに過したらしい。しかし彼等がアアサア王物語を歌ふときその言葉はフランス語であつた。イギリス語は當時教養のある國語ではなかつた。高雅な文學の用語としての古いラテンは別として、當代歐洲の文化的言語としてはフランス語であつた。十二十三兩世紀の歐羅巴文學の天空にはフランスが太陽として輝き、イギリスはその光を借りて映える月に外ならない有様であつた。イギリス人は地域的にも民族的にも自分達と直接に關係の深いアアサア王説話をフランス語を通して學ばねばならなかつた。英文學上早期のアアサア王物語はその殆ど總てがフランス語またはラテン語の翻譯であるのもさうした理由からである。本稿の主題『サ・ガウエイン』も原典は不明であるが、フランス語からの翻譯或は翻案と考へられてゐる。同じくフランスの原典から巧に選擇配合した材料を以てアアサア王物語を集成したのは十五世紀末葉のマラリイ (Malory, sir Thomas) 及びその大著『モル・ダルトウル』 ("Morte d' Arthur") は國王傳説の寶庫として後世の英詩人に大なる寄

與をなしてゐる。

五

アアサア王説話中騎士ガウエインは如何なる地位を占めるのであるか。一體國王自身が好戰的な一武將から理想化され偶像化されて民族の主君と仰がれるに至つたと同様に、アアサア麾下の圓卓騎士も原始的粗野な性格から漸次醇化の過程を経て騎士道社會の最高理念の表象となつたのである。その素朴な初期に於ては彼等は粗豪な、怪奇なまたは鈍重な男どもであつた。終日片足で立つてゐられるといふ男や、悲しいときには下唇を腰まで下し、上唇はまるで頭巾のやうに頭上にかざすといふ人間もあり、或は魔力により様々の奇力を現はす人物も大勢ゐた。國王の酒宴に列する面々の間には常に席次を争ふ猛しい葛藤が起り流血の慘事も屢々生じた。之を防ぐためにアアサアは異邦より一人の工人を招き一時に六百人の向ひ得る圓卓を造らしめた。これは國王旅行の砌は自ら携へ得るといふ便宜なものであつたといふ。およそ斯様な模拙な搖籃の中からロマンスの英雄が生長して、高雅な中世貴族の客室や深閨を賑はす語り物の主人公となつた。

騎士達の中特にロマンスの讀者に受けたのは初めはパーシヴァル (Perceval) やガウエインであつた。後にはマアリン (Merlin)、トリストラム (Tristan)、ランスラット (Lancelot) が持囃され、國王自らは寧ろこれら勇士達の武功を傍觀する脇師の地位に据へられる場合が多い。『サ・ガウエインと綠の騎士』に於ても詩題の二人がシテ、ワキであり、アアサアは子役か精々ツレ位の役を演ずるに過ぎない。

ロマンスの世界に住む圓卓騎士も時に榮枯盛衰を免れなかつた。ガウエインは後世の詩人、殊にテニスンによつて低く評價されてゐるが、彼は「ブリテンもの」初期の勇士中もつとも傑出した騎士であり、時にはアアサナを凌ぐ名聲を博した。彼こそは禮節の龜鑑であり、高貴な騎士の典型であり、勇敢と仁慈と聰明の美德を兼備し、雄辯にして剛毅、快活にして優雅、まことに閑然することなき圓卓の武士であつた。イギリスに於てレイアマンからマラリイに至る間の韻文ロマンスの主人公は殆ど皆このガウエインであつたといつても良い。

かやうにガウエインによつて表象される騎士道理念の構成には幾多の要素が入つてゐて、ここに詳述することはできないが、十一世紀以來イギリスに君臨したノルマン系王室の下に發展し來つた封建社會が最も尊重した諸性質であつたことは勿論である。従つてわが國の武士道が要求する徳目と異つたものが多く、殊にその著しいのは騎士と婦人との關係を律する倫理觀念であり、騎士は婦人に對し慇懃な奉仕を捧ぐべく、貴女にとりては勇敢なる騎士ならでは愛情の對照となり得ない。^(註5)かのデヨフリの誌す所によれば「婦人は三度の戦ひに武名を顯はしたる騎士にあらざれば愛するに足らずとなせり。かくて男子の勇氣は婦人の貞節を鼓吹し、婦人の愛情は武士の勇敢を刺戟せり」と。戰場に於ける武勇とともに客室に於ける禮節が騎士たるものの缺く可らざる美德であり、さらに高雅に熱情的に戀愛を語れることも騎士の風格を高めることと考へられた。キヤンタベリ巡禮中の若侍のやうに、詩歌管絃の道に長じ、「夜はる寝もせて熱き戀をなす」ことは懦弱遊惰ではなく、寧ろ騎士道の尊ぶ所であつた。

華やかさも亦ロマンスに於ける騎士道の一要件であつた。^(註6)富の豊かさ、裝飾の華麗、民びとの典雅さ」は騎士道の榮える國土にあつては必須な條件とされた。

かうした柔かさ華やかさの内面に堅固な道心が要求される。騎士はすべてキリストの、或は聖母の下僕であり、聖教のために苦痛に耐へることを榮譽と感ずる。アアサア王の騎士によつてなされた「聖杯探求の遍路」はまさに此の表象である。『サ・ガウエインと緑の騎士』の一篇が怪奇な探險物語の要素を一面に有ちながらその主調が教訓的なのは、主人公の堅い道心が能く人間性の弱みに堪へて、女性の誘惑に克ち死の恐怖に克つてその信仰を完ふしたためである。ガウエインは要するに騎士道の權化としてあらゆる美德を體得した武士として中世ロマンスの世界に輝く存在であつた。

『サ・ガウエインと緑の騎士』の梗概

第一章

トロウイの戦争畢るや、イイニアスは西の國々を平定し、その子孫は、ロミュラスがロオマを建設せしを始めとし、諸々の國家を創肇しぬ。ブリテン國肇造の君フェリックス・ブルウタス (Felix Brutus) もその眷族の一なりき。爾來その血統をひく諸王この國に君臨しけるが、アアサアこそこよなく高邁なる國君なりけれ。いざ、

傳へ聞くアアサア王綺譚の數々のうち、とりわけ奇しき物語を語らん。

ひととせのクリスマスの祝節に、アアサア王はキアメロット (Camelot) の宮殿にその麾下の武士、圓卓の騎士を集め、美女麗人を招きて、十五日が間酒宴を催し、歡樂を極めぬ。續いて新しき年の始めの賀宴に移り、貴人貴女居並ぶ中を装ひを凝したる王妃ギネヴィアのあでやかなる姿現れ出でぬ。之にまさる容姿の世にありとも

思はれず。アアサア王はやや童子の風ありて (sum-quatchild-gered)、かかる饗宴の席にありても、青春の血を沸かす冒險怪奇の物語を聞かでは、珍味も口にせず、長く座するに耐へざるほどなりき。いまし國王は食卓を圍む臣下たちと語りひつつ立ちてあり。王妃の傍の席にはサ・ガウエイン座し、かなたの側にはアグラヴェン、イウエンなど名だたる勇者座してあり。食卓には第一コオスの料理運ばれ將に饗宴初まらんとするとき、突如として大廣間の戸を排して闖入し來れる騎士一人あり。雲つくばかりの大男にして全身に緑の衣を纏ひたり。上衣、外套、頭巾、靴下はさらなり、頭髮、髯までも綠色なり。彼の乗馬もまた緑なり。かかる騎馬、かかる騎士は、嘗てアアサア王宮廷にて見しこともなし。緑の騎士の眼は電光の如く光り、その力の強き如何なるものも彼の打撃に耐え得べしとは思はれず。此男甲冑を身に着くることなく、弓矢楯をも携へず、ただ片手に柎の一枝を持ち、また片手に大斧を提げたり。その双先は剃刀の如く鋭く、その柄は緑の彫刻を施せし名作なり。かかる装束にてか

の緑の騎士は廣間に入り來り、誰一人に向ひて會釋するともなく、あたりを見廻しつゝ「此一座のあるじは何處におはすや、御意得たき儀あり」と叫ぶに、満座のものこの奇異の大男を必定變化魔物の類ならんと恐れ、睡魔に襲はれしものの如く聲も立て得ず。アアサア王は恐るる氣色もなく、殷懃にこの騎士を迎へて「よくこそ御入來、われは館のあるじアアサアと申すもの、願はくばしばしここに留り給へ」と云へば、緑人は應へて「否とよ、われここに來れるは、アアサア王とその騎士の名聲世に高く、

物の具着け、馬に跨りては、武勇並ぶものなく

Stiffest under steel-gear on steeds to ride (l. 260)

また遊戲の道に長じ、優雅禮法にも秀でつると聞きしかば、そのまことなるや否やを知らんとて、今日此處に來れるなり。わが携ふるこの柎の枝にて、わが平和の意圖を知らるらん。されど歸ればわが家に楯と槍の備へ無きに非ず」と云ふ。アアサアは「尋常の仕合 (battle bare) を所望めさるるならば、お相手仕る者あり」と應ふれど

も、かの男は「否とよ、われ若しものの具着けて立向へばわれに敵するものなからん。わが求むるは競技のみ。

クリスマス遊戯の相手こそ所望なれ。この一座のうち、敢てわれに一撃を與へ、その返報としてわれよりの一撃を受くるを厭はぬ勇者あらば、來りてこの斧を執れよ。

いまわれ一打を受け、一年と一日の後同じく一打を以て之に酬ゆべし」とて、もの凄まじき首切競技を挑み來れるなり。居竝ふ面々恐れて敢て答ふるものなし。緑の騎士赤き眼もてあたりを見廻し、緑の眉を顰めつつ「笑止や、アアサア王の館は是なるか。世に聞えつる圓卓騎士の高名もわが一語により、もろくも潰えさりぬかな」と嘲けり笑へば、アアサアは烈風の如く怒り立ち(as wrath as wind)この挑みに應じて、「誰か汝の大言に怖じ恐る者ぞ。汝の求むる所まこと癡愚の沙汰なれどわれ是を許しつかはさん。いざその斧を與へよ」と言ひつつ彼の男の方へ走り寄り、斧を受取り將に之を振り上げてかの怪奇の武士に打つてかからんずる氣色なり。

そのとき王妃の傍にありしガウエイン恭しく王に向ひ

席を離るる許しを乞ひたる後、アアサアに奏して曰く「願くば陛下、この冒險は臣に許し給へ、斯くも愚かしきわざに陛下自らたすきはり給ふこと然るべからず。われいと弱く、いと迂愚のものなれども、この緑の騎士の相手仕らん」と願ふに、居竝ふ貴人も皆ガウエインにこの競技を試みさせ給へと口添へしければ、アアサア王さらばとて件の斧をガウエインに授け給ふ。ガウエインは跪いて之を拜受しやがてこの武器をひつさげて緑の騎士の方へ詰め寄れば、かの男更に動する色もなくガウエインに向つて云ふやう「いで汝と契約を固めなん。まづ汝の名は如何に」と。ガウエインはわが名をなのり、且つ一打撃授受のこと心得てありと云へば、かの緑士之を聞きて喜び、「ガウエインよ、汝の手より一撃を受けんことわが喜なり。されどわれより返しの一打を受くるためわが住家いづくに在りとも之を探し求めんことを誓はれよ」と云へば、ガウエイン「汝の住居はいづくぞ、名は何ぞ」と疊みかけて尋ねれども件の男答へず。「汝首尾よくわれを打たばそのときわが名をなのり住家を教ふべ

し。いざ斧を執り、なが手練のほどを見せられよ」とて緑の騎士は地面に座し、髪を搔き上げて、頸背を露はに見せて潔き用意のさまなり。ガウエイン斧を振り上げ打下せば、首の骨は碎け肉はみごとに兩斷され、はずみを喰つて斧は大地にめいり込みぬ。彼の首は胴よりちぎれ落ち、血潮はあたり一面を朱に染めぬ。されど緑の騎士は泰然としてたじろがず。やがて立上るよと見る間に、落ちしわが頭を引摺んで、馬上高らかに打乗りたり。その頭は髪もて提げられけるが、眼を上げ口を開きて云ふ「やよガウエイン、汝さきつ頃約せし如く必ずわれを捜し求めよ、緑の禮拜堂を尋ねて來れ。そこに今しわが受けし打撃を汝に返し報ゆべし。時は來らん年の正月の朝なるぞ。緑の禮拜堂の騎士としてわれを知る者多ければ、汝の志操かたければ必ず約を果し得ん。來らで不信者の汚名な受け給ひそ。」かく云ひつつ伴の騎士は己が頭を手提げしまま、馬の手綱をさつと引き廻して乗り去り、ゆき方知れずなりぬ。アアサア王とガウエインは去りゆく緑の騎士を見送つて呵々と大笑しぬ(laugh and

『サ・ガウエインと緑の騎士』について

grin)。王は妃を顧みて、「この驚異に、ゆめ心擾し給ふな、これぞうてつけのクリスマスの餘興なるぞ」と快活に語り、ガウエインに命じてかの斧を上段の壁面に懸けしめ諸待と共に盛んなる饗宴にその目を終りぬ。いでガウエインの君よ、心して、始めたまひし冒險の苦しさにたじろぎ給ふな。

第二章

ガウエインが怪異なる冒險を始めしクリスマスの季節もやがて過ぎ、レントも終り夏となりぬ。花咲き風薫る夏も去り、落葉の秋を経てはやくも再び冬は訪れ來り、ミクルマスともなればガウエインは緑の禮拜堂の騎士を求めて旅路に出立つ準備に心忙し。アアサア王は萬聖節の日、ガウエインを送るため、いと華かなる酒宴を催せば、集ひ來りし騎士、貴婦人みな口にはそれと云はねども、深き悲しみをこの勇士のために感ぜざるはなかりき。宴はててガウエインはアアサア王に旅出の勅許を乞ひ、翌朝發足仕るべき旨言上すれば、圓卓の騎士の面々

は、ガウエインほどの武士をむぎむぎ死地に赴かしむことの悲しさよと歎けども、ガウエインさらに憂ふる色もなく、「嚴たる運命に對しては、たゞ試み力めん外はなし」と云ひぬ。

その翌朝ガウエインはいよいよ出陣の装束を着ぬ。トルウス製の敷物を床に敷かせ、その上に立ちて、サルシア絹の胴衣を着、頭巾を冠り、足には黒鐵の靴を穿き、脛當を着け、腿には腿甲を纏ひ、その外腕といひ肱といひ手といひ何れも良質の武具もて被ひ、胴には輝く鋼の鎖子鎧を、更にその上に陣羽織を着ぬ。拍車は黄金づくり、劍は絹紐もて腰に佩かれたり。このきらびやかなるいでたちにてガウエインは禮拜堂の祭壇高く修ぜられたる彌撒を聴聞し、やがてアアサア王とその臣下たちに暇乞の挨拶をなしたれば、彼の乗馬グリーンゴレットの用意も調ひ、その背には黄金の縁飾り美はしき鞍を置かれたる。ついで彼は寶石燦として輝く兜を頭に戴く。彼の楯には純金もて畫かれたる五稜形の紋章あり。そもそこの五稜の紋所はその昔ソロモン王の考案になるものにて、

「眞實」の表象なり。これまことにガウエインの如く信實にして禮節を尙び、純潔にして有徳の士には相應しき象徴ならずや。ガウエインはやがて槍を手にとり、人々におさらばを告げ、駿馬に拍車あてて駆け出しぬるその勢、蹄は石上に火花を散らしけり。

He spurred the steed with the spurs, and sprang on his way, So swift that the stone fire struck out there after (ll. 670—1)

あと見送りし人々は深く悲しみ、比ぶものなきこの勇者は一世の指導者ともなりぬべき人なり、あたら命を鬼神(an elvish man)のために失はんことを惜しけれと、熱き涙を流して歎くもの多かりき。

ガウエインはたゞ一人英蘭の諸領をさすらひ、北ウエイルズ近くなるまで遭ふ人どてなく、馬のみを旅路の友とせり。ホリヘツドを過ぎウイロオルに入り、みちみち緑の會堂の緑の騎士を尋ね求むれども答としてその消息知れず、彼の面に憂色の漾うこと幾度なりしぞ。嚴また

巖を攀ち、川また川を涉ち渡り行くほどに、蛇、狼、蕃人と戦ひ、あるは野牛、熊、野猪を敵とせり。これにも増してガウエインを惱ませしは厳しき冬の寒さなり。かく苦難のさすらひの中にクリスマスの前夜を迎へぬ。その朝ガウエインは深山幽谷の樺木多く茂れる所にをりて、

枯枝に悲しく鳴く鳥の聲を聞きゐたり。彼はマリアに祈りを捧げ、「クリスマスの彌撒を聴かま欲しければ、願くば人の住む所へ率てゆきたまへ」と願へば、その祈り言ひもあへず忽ちに、美はしき城郭一構へ森の樺の木の間より輝く陽光を浴びて聳ゆるを見たり。ガウエイン直ちにその城の正門に駆け行きて見れば、跳ね橋は吊り上げられ諸所の門は固く閉されたり。胸壁、物見櫓、圓塔の結構を望み見て、城内のたゞ一隅にだに宿ることを得ば幸ならんと思ひつつ、ガウエイン案内を乞ひ、ほどなく出で来りたる門番に向ひ、わが爲めに一夜の宿をば城のあるじに願ひ給へと云へば、かの門番は答へて「いつまでもにても御意のまま留りたまへ」と答ふ。やがて多くの騎士従士はガウエインを廣間へ請じ入れ、兜を脱がせ劍

をはづさせ、いと懇ろにもてなす。ついで城主みづから現はれ、丁重にガウエインを迎へて云ふやう「心のままに振舞はせたまへ。此處にあるもの皆卿の御意のままに用ひたまへ」と云へば、ガウエイン之を謝し、主客は互に抱擁の禮を交はしぬ。

ガウエインはあるじの容貌を打見るに、年たけたるもののふにして、その髭は眞黒にて面上には燃ゆる火の熾烈さを湛へたり。一國の君一城のあるじに相應しき人物とぞ見えたる。あるじはガウエインに侍する小姓を特に定め、また一室をさきて彼の居間に充てぬ。この室の調度すべてに美はしく、寢具は高雅に、絹の窓掛には黄金の縁飾りあり、壁面や床上には綴織ひるげられてあり。ここに人々ガウエインの鎧を脱がせ、運び来りし数々の美服の中より良きを選びて着せしむれば、彼にまさりて美はしき騎士世にありとも思はれず。さらにまた炭火燃ゆる爐邊の椅子が彼のために置かれ、刺繍美しき外衣の貂皮もて裹づけしたるが彼のために運ばれ、ガウエイン全く寒さを忘れぬ。やがて彼は沐浴をおへて食膳につ

けば美味珍肴運ばれ、葡萄の美酒まで注がれければ、ガウエインいと心悅くなりぬ。

ガウエイン問はるるままにわが名をなれば、館の人々はアアサア王麾下の騎士として世に隠れなき勇者を目のあたり見るこの嬉しさよとて喜ぶこと限りなく、互に囁きて曰く、典雅なる舉止と慇懃なる言語の典型をこの騎士よりを學ぶを得ん、われらの客人こそ「禮節の師父」なればなり、げに斯るまらうとをわれらに遣はされしは冥加に餘ることなり、又みやびたる戀の語らひ (love-talking) の術も彼より學ぶべし、などと語り合へり。夕餉を了へて一同禮拜堂に詣でて共にクリスマスの夜の彌撒を聽聞す。城主と席を同じうして座しゐたるガウエインはこの御堂にて此城主の夫人に會ふ。夫人はその容色王妃ギネヴィアにも勝るほどの麗人にて、多くの侍女にかしづかれぬ。また一人の老婦人この奥方の傍にありて手をとりて之を導きぬ。老女はその體軀矮小にして、その頬はこけて皺より、姿態甚だ醜惡なるが、これにひきかへ若き夫人はいとみづみづしく「その胸、その

頸、あらはに見えて、丘に降りつもる雪よりも清し。」この婦女の姿を見るや、ガウエインはあるじの許を乞ひて彼等に近づき進み、老婦人には懇ろに會釋し、若き夫人に對しては敬しく抱擁接吻の禮をなし、彼等の下僕たせたまへと乞ひ (asks to be their servant)、やがて一同打連れ御堂を出でて廣間に入れば、名香は惜しみなく薫ぜられ、美酒豊かに注がれ、主客ともに打寛ぎて樂しむ。館のあるじは着けたる頭巾を脱ぎて槍に打ち懸けて、クリスマスの座興に最も秀でし方に此品進すべし、われもやわか敗くべきなどと戯れて云ひぬ。はや夜にもなれば、ガウエインは己が寢室と定められし一室へ退きぬ。つとめてクリスマスの日となれば館の内に歡喜あふれ、饗宴いと盛に催され、ガウエインは城主の奥方と語らひつゝ愉しくこの佳き日を過しぬ。かくて三日の間歡樂を盡したる城内の人々も聖ヨハネ祭の日を最後として降誕節の慶祝を了へ、客人ども暇を告げて館を去りゆく人も少からざりしが、あるじはガウエインを猶も留めんとするを、ガウエインは之を辭し、われ重き使命ありて、元

旦の日に緑の禮拜堂を訪れんとす、その所在を知り給ふや、とあるじに尋ぬるに、あるじ答へて曰く、そは二哩ばかりのいと近き所にあれば道の案内も致すべしといふ。ガウエイン打喜び、なほ暫く留ることなりぬ。そのときあるじの曰く「われは明日より朝毎に狩獵に出づべし、卿は羈族の疲れも未だ癒え給はざれば、明日彌撒のあひだは室に休らひ給へ。妻は卿とともに食事を攝り、卿の御相手をしてお慰め申すべし。玆にお約束願ひ度き儀あり。われ狩に出で獲らん森の幸は何にてもあれ、歸りて卿に献すべければ、卿もわが不在のあひだ館の中にて得給ふべき幸をわれに與へ給へ」と云へばガウエイン之を諾ひ、やがて夜ともなれば皆それぞれの寢室へと引退りぬ。

第三章

翌日夜も未だ明けやらに城主は起き出で、騎士を従へ、馬に乗り、終日鹿狩に餘念なかりき。これにひきかへガウエインは寢室にありて、美しき天蓋の下に垂絹をめぐ

らしたる床に身を横へるたりしが、戸口に人の忍び來るけはひあり。ガウエイン垂絹の透間より誰ならんと窺へば、かの美しき城主の奥方なり。そと戸を閉めて彼の床に近づき來る女の様子にガウエイン恥らひて、態と眠れる状をよそへば、女人は靜に歩み寄り、垂絹を押しわけて入り來り、彼の床の邊に座して目醒むるを待たんとする有様に、ガウエイン心の中にて深くこれを訝りしが、さながら驚き目醒めたる態にて起き上り眼を見開きて見れば、かの麗人はおとがひと頬には白と朱とを雜へて美しく、小き唇には笑を湛へてゐたり。夫人は彼に會釋をなして云ふ「かく人の入り來るをも知り給はぬ寢坊の君よ、いで君を床に縛りつけなん。わが夫はいま家にあらず、わが侍女どもも寢てあり、戸を鎖したるこの室にあるは君とわれのみ。わが體君に委ねまゐらせん」とて、なまめかしく言ひ寄りてガウエインの心を誘ふを、騎士は慙慙に禮節正しく答へつつ受け流して巧にその誘惑を却けしかば、夫人は空しく辭し去らんとて笑ひつつ、「君よ、まことに世に聞えつるガウエインの君にしあらば、

女人とかく長く對座し給ひて一度の接吻を求むる禮節を忘れ給ふことよもあらじ」と云へば、ガウエイン騎士のならひとて之を諾ふ。夫人は彼に寄り添ひ彼を抱きて接吻しぬ。やうやくに夫人を送り出してガウエインは彌撒を聴き、その日、夕月の出づる頃まで館の婦人達と共に愉しげに語りて時を過しぬ。

さるほどに狩に出でし館のあるじ一行は首尾よく一頭の鹿を射止めてその腹を割き肉を切り、臟腑は犬に喰はしめ、家路につきぬ。「獲物を狩場にて處理する手順は委曲を盡して叙してある」

森の幸を得て館に歸りしあるじは、一同を集め、ガウエインを招きその獲物を彼に呈すれば、ガウエイン之を納け、かねて約束の報償として主に接吻を與へぬ。主人は快くこれを受けて、何處よりかかる幸を得給ひしと尋ねれど、ガウエイン「そは問ひ質し給ふな、約せしことの外なれば」と答へ、やがて主客ともに晚餐の卓につき、爐を圍み酒を酌み、重ねて翌日の獲物の交換を誓ひ交はし、夫々の寢室にひき退りぬ。つとめて鶏鳴三度聞えざ

るに既にあるじ起き出で狩に出で立ちぬ。やがて彼は狩場にて一頭の野猪を發見し、ひねもす之を追ひぬ。

この朝ガウエイン未だ起きやらす床に臥したるとき、かの城主の妻なる女人また彼の寢室に忍び來りて、彼のふしどの傍に座し、「昨日わが教へ參らせしことをはや忘れ給ひしや」とて彼に接吻を促し、みづから身をこごめて彼を抱擁しぬ。猶も夫人は言葉をつくして騎士の心を惡に誘はんとすれどもガウエインは慇懃に答へつつその志操を守りぬ。乗すべき隙もなければ、夫人はいま一度の接吻をガウエインに與へてこの朝もまた空しく去りゆきぬ。

一方狩獵に出でし城主はその一行とともに荒れ狂ふ野猪を遂に屠りその肉を館に持ち歸りガウエインに贈れば、彼は喜びて之を納け、二回の接吻があるじに與へて之に報ゆ。やがて晚餐を共にし主客歡談に時を過しけるが、そのときガウエインはあるじに、翌朝出發すべければとて暇乞を述べんとするに主人これをとどめ、「必ずやかの緑の御堂へは元旦の朝早く (long before prime) 着

給ふべければ枉げていま一夜とごまり給へ」と云へば、ガウエイン是非なく之を諾ふ。その夜主客は三たび獲物の交換を約しぬ。つとめて館の獵人ども森にゆきて一頭の狐を追ふ。この朝ガウエインは垂絹に圍まれしふしどに熟寢してありしとき、かの館の女あるじ、頸と胸とをあらはに見せたる美はしき衣を纏ひて入り來り、明日に迫れる冒險を夢みてありし騎士を呼び醒まし、その面に接吻しぬ。ガウエインはかくも美はしく着飾りたる麗人の容姿を見て湧き上る喜悅を心に感じぬ。こはまさに危機なりき。『マリアが此騎士を守り給ふことなくば』(Mary of her knight min, l. 1769) ガウエインは此とき恐らく罪に陥りしならん。彼はこの女性の求愛をむげに却くる非禮を犯すか、或はこの館のあるじを裏切る叛逆の罪に陥ることを恐れて逡巡す。夫人はこれを見て「君はわれに優りていとしき愛人を有ち給ふや」と怪しみ尋ねれば、ガウエインは「否とよ、われには戀人なく、またあらんことも望まず」と心強くも言ひ放てば、女は心悲しく溜息つきつつ彼に接吻し、「せめては憶ひ出のよ

すがに、何にてもあれ、かたみの品賜はれかし」と乞へども、ガウエイン旅の身なればその用意もなしと答ふ。夫人は「しからばわれより君にまゐらせん」とて寶玉のきらめける黄金の指輪を差出すをガウエイン辭して受けず。さらばとて夫人は自ら腰のまわりに巻きける帶紐の緑の絹もて飾れるを解きて之をすすむれど騎士は重ねて之を辭し、「水火の苦しみにも耐へて君の忠僕たらんするわれにはあれど、贈り給ふものは何にてもあれ、受くること叶はじ」と云ふ。夫人はこれに應へて曰く「この紐いとはしたなき品なればとてかくは受け給はざるにや、まことこの帶の中にひそむ奇しき力を知らんほどの者は、よも之を輕んじ給はじ。この帶着け給ふ人は劍の難に遭ふことなく、天下如何なる者も之を傷け之を殺すことを得じ。」この言葉を聞きてガウエイン心に思へらく、いみじき品かな、われ緑の御堂に赴きて首の座に直らんとき、之により命を全ふし得れば幸ならずや、とて之を望む心切なり。遂にガウエインは夫人の請ふままにこの帶紐を受け、かつこのことは館のあるじにも秘して

語らじと約束す。かくて夫人はこの朝三度ガウエインに接吻して彼の室を辭し去りぬ。彼は起き上り、夫人より贈られし緑の紐を秘かに身に着け、その朝の彌撒に詣で歸り、かの淑女たちと常にもまして心愉しげに遊び語りてその日を過しぬ。

さるほどに狩に出でゆきし城主とその一行はひねもす狐を追ふて森をかけ巡り、夕暮近き頃ようよう之を狩り得て家路に就きぬ。歸り來ぬるあるじを迎へてガウエインは三度之に懇ろなる接吻を興ふれば、城主はその目の獲物たる狐皮一枚を獲しのみ」といふ。やがて館の人々はこの狐皮一枚を獲しのみ」といふ。やがて館の人々打揃ひいと愉しく、いと盛に晚餐を共にし、やがてそれぞれ寢に就く刻限とはなりぬ。ガウエインは樂しかりし逗留の間の心盡しをあるじに謝し、明朝發足については道案内の人をひとり附け給へと乞ひ、また館の淑女たちにもみな懇ろに別れの挨拶を述べ、をのこともにもそれぞれ厚意を謝し別れを告ぐれば、一同この騎士との別離を惜しみ悲しみぬ。その夜ガウエイン寢所に入りしも明

日に逼る冒險を思ひて安らかに眠り得ざりき。

第四章

その夜も更けてはや新年の朝近くなりしが、戸外は風雪はげし。部屋の燈火にてらされてガウエイン起き出で、從者と呼び武具の用意を命じぬ。鎖子鎧も金札鎧も磨かれて錆なきは從者の日頃の心盡しぞと喜びつつガウエインは晴の装束を着け、かの夫人より贈られし愛のしるしなる帶を腰のまわりにしめぬ。この帶は緑の絹もて作り、黄金の飾り美はしき品なれど、ガウエインが此帶を忘れて着けしことは、全くわが命の故なり。やがて名馬グリンゴレットの用意をさせ、見送る館の人々といと懇ろに挨拶を交はし、愛馬に打跨つて去り行きぬ。彼に従ふは緑の御堂への道しるべき下僕一人のみ。いまや二人は滿目蕭條たる冬の山野を征き、日の昇る頃とある高き山の頂に達しぬ。そのとき案内の從者は騎士を止め云ひけるは、「ここまで御伴申しつれば、はや緑の御堂も程近し。さりながらここには極惡なる者住みをり、その巨

軀はアアサア王麾下の四勇士にまさり、古のヘクタアをも凌ぐ。その附近を通り過ぎんとする者をば誰彼の分ちなく之を殺害する残忍無慈悲の男なり。たとひ御身に二十の命あらばとて、この男のために殺され給はんこと必定なり。願くばこの者にかかづらひ給ふことなく、こゝより去り給へ。われ神明に誓うて、御身が遁げ給ひしことを人に語るまじ」と言葉をつくして翻意せしめんと試むれど、ガウエインいつかな聴かず、遂に従者も是非なしとて彼を後に残して去りぬ。

彼は教へらし道を辿りて谷へ下りゆき、あたりを見廻せど峨々たる巖の聳立して恐ろしき影をあたりに投ぐるを見るのみて、人の住み家はさらになし。やゝ彼方に草の生ひたる丘見えてその端と兩側には穴あり。これをしも御堂と云はゞ、眞夜中に惡魔こそ呪禱を唱ふる祠なるべけれ。ガウエイン心に思へらく「草繁りて醜きこの御堂にてかの綠衣の怪人が魔道の勤修をなすらめ。われと約せし男なむ正しく惡魔なるらめ」と。彼は甲を頭に戴き手には槍を握りて、この丘の岩の方へと進み寄れば、

折柄轟々と聞え來るは刃物研ぐ音なり。ガウエインさらに臆せず、大音聲にて叫ぶやう「ここに住み給ふは誰ぞ。ガウエインいま此所に参りたり。用あらん者ははや出であひ給へ」と云へば、これに應じて穴より現はれ出でしはそのかみと同じく綠衣を纏ひし巨人なり。その手には研ぎすませるデンマアタ流の大斧の四尺ばかり長きを持ちゐたり。「殊勝なるかな、ガウエインよ。われ汝の打撃に復報せんと約せしこの新年の目に、目限違はで善くぞ來りぬるかな。はや汝の甲を脱ぎて首を差出せよ」と叫ぶ綠の騎士に應へてガウエインは「いざ一打をわれに加ふる御用意あれ、われ君のなすままに任せん」と云ひつつ首をさしのべ頸筋をあらはに見せ、恐るる氣配もなし。

綠の怪人その時業物を握り全身の力を込めて之を高く振り上げ、まさにガウエインに致命の一撃を下さんする態なり。流石のガウエンもこの瞬間

肩をやゝ窄めて刃よりたじろぎぬ。

And shrank a little with the shoulders for the

sharp iron. (I. 2267)

緑の男この有様を見て云ふやう「まこと汝は天下の勇者と聞ゆるガウエインにてはあらじ。未だ身に傷害を受けざるにはや逃げんとする如き怯懦のふるまひ心得がたし。われアアサアの宮殿にて汝に打たれしとき泰然自若として動ぜざりき。さればわれこそ汝に優るをのこなれ」と。ガウエインの曰く「まことわれ一たび遂通しぬ重ねてせじ。いざ疾く打て」と促せば相手はさらばとて例の大斧振り上げたれど、態とそらして打たず。ガウエイン怒りて「いざ撃て、汝心臆せる者よ」と呼ばれば、緑の男再び詰め寄り來り、既に觀念しけるガウエインの頭上に軽く斧を振り上げ、その双縫に彼の皮膚を通し淺く肉を傷くるほどに打ちたり。されど血潮は流れて雪を染めぬ。これを見てガウエインかつばと起き上り一槍身の長さほど飛びしざり、兜をおつ取り頭にかぶり、楯ひきよせて肩を掩ひ、白刃を抜き放して言葉するどく叫びけるは「撃つを止めよ。アアサア王宮の誓約にはただ一打とのみあり。その一打を汝は既にわれに加へたり。重ね

て打たんする所存ならばわれも之に酬ゆべし」と。

かの緑の騎士は大斧の柄を大地につきさし、その頭身を寄せつつ、凜としてものの具取つて立つたるガウエインのさまを眺めて心喜びたる氣色なり。此男呵々と打笑ひ、愉しげにガウエインに告げて云ひけるは「さのみな怒り給ひそ。初めの伴撃は館に於ける第一夜の約束のため、第二の脅かしは君がわが妻に與へし接吻の故なり、また三度目に君に失態ありし故にかの一打を受け給へるなり。まこと妻を君の許に遣はせしはわれなり。妻の求愛、君の妻への接吻みなわれ知れり。このところ君の振舞天晴なり。『眞珠の白豆にまさりて貴き如く』ガウエインの君は他の勇士にすぐれ給へり。されど妻より秘かに帶紐受けられしことを小瑕と云ふべけれ。されどこは戀心にはあらで命を惜しむ情より犯したる罪なれば、さまで君を咎めまじ」と云ふ。ガウエイン之を聞き慚愧に耐へず

All the blood of his breast blend in his face

(I. 2371)

胸の血潮みな顔面にたぎりぬ。

彼は「怯懦と物慾こそ呪はしけれ」と叫びつつ、かの帯をとつて緑の武士に投げつけ、翻つてわが怯弱と不信の振舞ひを悔悟告白すれば、件の騎士は笑ひつつ慇懃に云ふやう、「既に懺悔し、わが斧の刃先より苦行を受け給ひし上は、卿の罪淨められたり。この緑の帯は記念として卿に贈るべし。猶わが館へ歸りて新年を過ぎせ給へ」とて切りにいざなへども、ガウエイン之を辭して、「願くば奥方といまひとりの貴婦人に宜しなに傳へ給へ。むべなるかな痴人が女性の欺術により身を誤るは。往古よりアダム、ソロモン、サムソン、ダビデなど傑れたるをのこにさへその例多し。女性をば信することなくて愛し得ばいと幸ならんに」と云ひぬ。

さて贈られし帯はガウエイン厚き感謝を以て之を受け、彼が犯せし罪の記念として永く身に着け、心驕らんるとき眺めて反省のよすがとなすべしと云ひ、最後に緑の騎士の名を尋ねれば、かの武士答へて云ひけるは「まことわれはオデゼルのバアンラツクなり。魔術王マアリ

ンの門下なる魔女モオガン・ラ・フェイの神通力により斯様の姿と現ぜしものなり。彼女は圓卓騎士の名聲世に高きを嫉み、又王妃ギネヴィアを悶へ死に至らしめんとて怪奇の形せる男を王宮に遣はせしなり。わが館に住む件の老女こそこの魔女なれ、卿のためには正しく伯母にあたり、アアサア王のためには異母妹なる女なり。」と委曲を打明けて語りたり。兩人訣別の禮に抱擁接吻し、ガウエインはアアサア王の宮殿さして歸りゆくぬ。

道みち幾多の冒險をなしつつガウエインはアアサア王宮殿に歸り着きぬ。首に受けし傷は既に癒えたれども、犯せし過ちの憶出でにかの帯を綬帶の如く左の腕の下に斜めにかけたり。國王王妃をはじめ諸侍に歡び迎へられ、問はるるままにガウエインは旅中のさまざまの事件を残りなく語り、慙愧の思ひに面を紅潮させつつかの帯に關する一條を物語り、頸の疵痕を示しぬ。「この緑帯こそわが怯懦と慾心の表章として、生き永らう限り身に佩ふべけれ」と云へば、國王をはじめ居並ぶ騎士貴婦人もみなガウエインに倣ひて緑の綬帶を着用することとな

れり。まことブルウタスがブリテン國創肇の後アアア ぎ給ふ主がわれらをその至福へ導き給はんことを、アア
王の御世にこそこの事件は起りけれ。願くば茨の冠を戴 メン。(大尾)

註

1. 「フランスもの」——*Matière de France* を假にかう譯した「ブリテンもの」のブリテン (Bretagne) の地域については異説があるが、ウェイルズにしても、ブリタニーにしても、とにかくケルト民族の住んだ國土である。
2. 本稿で取扱つた史的考察は主として左の三著に據つた。
- a) Baker, E. A.: 'The History of the English Novel' (London, 1924).
- b) Saintsbury G.: 'The Flourishing of Romance and the Rise of Allegory' (Edinburgh, 1923).
- c) Schofield, W. H.: 'English Literature, From the Norman Conquest to Chaucer' (London, 1925).
3. キャクストンが一四八五年出版した "Morte d'Arthur" の序言参照
4. ギルダスが時世を慨歎して著した "De Excidio et Conquestu Britanniae" は西紀五四七年以前の作と考へられる。
5. Schofield (*op. cit.*) p. 170
6. Ibid.
7. この梗概は E. E. T. S. 刊行 Richard Morris 編纂 (1864) 及び同會刊行 Sir I. Gollancz 編纂 (1939) の原典に據り、且
Nelson, Webster 共編 "Chief British poets of the Fourteenth and Fifteenth Centuries" 中の現代譯を參考とした。
引用句に附した行數は Gollancz 編纂のテクストのそれである